

特集 1

イベントで日本を元気にしよう

一般社団法人日本イベントプロデューズ協会
理事長 清水卓治

今、100年に一度の不景気と言われています。

景気不景気と循環の常識から言えばいつかは回復する筈ですが、しかし、大店法により全国各地に林立するホームセンターの扱ひ商品は、町の商店街の扱ひ商品の大半を根こそぎ奪うものであります。ホームセンターが潰れない限り、金物屋、材木屋、花屋、本屋、文房具屋そして、デパートすらも復活はありません。そして、全国の商店街を得意先とするわがディスプレイ業界も、構造不況業種に転落してしまいました。

100年の不況とは、もう戻ってこない循環なので、進化発展する世の中で、我々が提供できる新しいサービスを見つけられなければ、生きてはいけません。

ではどのような道筋で、我々の発展や日本経済の再生があるのかを考えてみましょう。

民主党政権交代「箱物は無駄だ」でよいのか。

2016年、オリンピック東京立候補は敗れました。もう一度立候補すべきと思いますが、都庁、民主党は賛成しないかもしれないと言います。IOCの審査において、東京のオリンピック熱が他国の候補地と比し、低いと見られた原因はなにか。それは、お台場のメインスタジアムに対する関心度、国立競技場を使わない違和感から来ていると思われまます。

東京都がお台場の埋立地に10万人のスタジアムを作ることは、調布の味の素スタジアム建設への二重投資であり、むしろ、オリンピックを機会に古い神宮球場の建替え、国立競技場の建替え、明治神宮外苑の再開発を含む、東京中心部の再生を願うスポーツ関係者の悲願を置き去りにしたためではないでしょうか。

都議会でも第一党になった民主党は、財政難を理由に箱物建設にブレーキをかける雰囲気であります。

しかしここで考えていただきたいのは、日本の中心にある東京都のスポーツ施設環境はまだまだ貧弱でありますし、大観衆が集まれるスタジアムを用意することは首都としての責任でもあります。

それには、国の関与が必要不可欠です。国立競技

場のトイレ環境、観覧席のゆとりのなさ、レストランの不備、スイート席等のVIP環境の欠落等、国際試合を行うには国辱的レベルにあるのです。

サッカーマスコミ記事に「聖地国立競技場」という言い方がされるようになりましたが、2002年ワールドカップサッカーには、国立競技場は立候補しませんでした。なぜなのでしょう。立候補して、建物を現代のニーズに合うようにリニューアルするチャンスだったのに。

代わりに決勝会場になったのは、日産スタジアムでした。横浜市に国のやるべき仕事を押し付け、今横浜市とマリノスチームは、大きすぎる日産スタジアムの負担に辛吟しています。お台場につくるメインスタジアムも、宴のあとの負担の二の舞は目に見えるようです。

2000年、私はアトランタオリンピック開会式を見学しました。カシアス・クレイが最後の聖火ランナーを務めたシーンを記憶している方も多いと思います。あのスタジアムはオリンピック終了後、改築されて、メジャーリーグアトランタブレーブスの球場に衣替えしています。最初からそのように計画されているのです。また昨年、ニューヨークのメッツとヤンキースの2つの球場が、そろって新築されました。野球の更なる楽しさの追及をテーマに、恐慌のさなか、各地球場のリニューアルが着手されています。ダラスカウボーイズのフットボールスタジアムも新築されました。

スタジアムがニーズに合うように改善されるのは、経済的に負担を減らし、増収をはかるためであります。

この点、日本は国体やワールドカップという一過性の機会に建築され、その後のスポーツ振興や多目的利用に役立つよう改良するという視点に、非常に欠けていると思います。

シミズオクトは、東京オリンピック時に誕生した日本武道館や国立代々木競技場など、沢山のスポーツ施設の多目的利用の実地を体験してきた元祖であります。

多目的利用とは要するに、設計当初には無かった新

たな目的に利用できるように工夫するという事です。東京オリンピック以前には、スポーツ会場専門のサービス会社は皆無で、先代の清水芳一が個人として請負いをしていたのが唯一の存在でした。

東京オリンピック誘致が決まり、東京体育館の客席スタンドやいす並べなど、個人でなく会社組織を作って請け負いました。そのような時代に、私は先代から口説かれてシミズに入社したのです。

施設を使いこなすのが「裏方」の使命

最初の仕事場は千駄ヶ谷の「東京体育館」でした。8000人の観客が入る都内唯一の大会場でしたから、スポーツや式典、音楽会など頻繁に利用がありましたが、暗幕は、必要なとき仮設に行かねばなりません。そして、天井裏に吊りもの作業をする環境は危険そのもの、命懸けでした。

オリンピックが終わり、柔道や剣道の道場としての利用しか考えてなかった神聖な皇居の一隅にある「日本武道館」は、ビートルズ公演が行われたのをキッカケにコンサート会場として利用できることが認知され、俄然申し込みが殺到するようになりました。

初期のころは搬入エレベーターがなく、地下に機材を降ろして搬入するのが大変でした。東、西ロッカーの前には、某業者の平台がうずたかく積まれており、シミズの機材は置き場がないので、都度持ち帰らなければなりません。

オリンピックプールの代々木競技場は、プールに蓋をしてバレーボールや体操の大会を誘致したり、コンサートを行うため変形のガラス窓に暗幕を付けるなど、会場を丸ごと改築するに近い仮設設備工事をを行い、且つ、厳正に現状復帰することを繰り返してきたのです。

コンサートには大変な電力を使いますし、火も、水も、レーザー光線も、色々なスモーク、排気、排水、消防施設、そして吊り物は、当然アリーナ全体どこからでも、相当の重量物が吊り下げ可能でなければなりません。

日本武道館も、代々木競技場も、その後の施設担当の皆様の理解ある研究のお陰でたゆまぬ改良が加えられ、今日のフル稼働があるのです。

我々には自然に、体育施設運用の経験やノウハウが蓄積されていきました。体育館でも劇場でも、その建物を実際に使いこなすのは、役者さんより、我々裏方の使命があるからです。

そのような視点から見ると、設計者がはじめに我々

に相談して、搬入口や、吊り物設備の設置方法を考えていただいた建物の方が有利性は明らかであります。

横浜アリーナが出来るとき、東京舞台照明出身の宮尾益美氏が中心となって、シミズオクトの菅原アニなど関係者が集まり、ゼネコンの原案を修正、無駄な天板を外し、3メートル間隔に吊りフックを付けたら、搬入口を広げ、大型トラックがアリーナに直かに入れるよう提案しました。お陰で、最高に使い勝手のよいアリーナとなっています。また、さいたまスーパーアリーナも同様であります。

数々の改良によってもたらされるグローバル化

ワールドカップサッカーで新築された沢山のスタジアム。改良すべき点はないのでしょうか。また、再び立候補するのですから、ダイナミックな視点で見直してみましよう。

例えば札幌ドームは移動式サッカー場で、転換により、プロ野球のフランチャイズを誘致できました。昔、シミズでそのような提案をし、北海道日本ハムファイターズは3回もパ・リーグの覇者となり、道民ファンを獲得しました。しかし、このまま経費の掛かることを続けるのでしょうか。

転換はワールドカップサッカーという、一時的な行事を誘致するためと割り切って、後背部の空き地をサッカー専用スタジアムとして安く活用できるようにしたほうが、コンサドーレにはベターではないかと思うのです。

札幌ドームはトイレに行くのに階段を登ってさらに下らないと行けません。高齢者のトイレ往復用にトンネル通路を掘るなり、改良すべきであると思います。

日本の公共施設は、何らかの形で役所が絡んでいることが、改良されない一番の要因ではないでしょうか。狭い日本の都市空間の事情もありますが、公共用地、多くは公園の中にあります。大阪城ホール、日本武道館は、世界中のアーティストを迎えながら、彼らの機材を積んできたコンテナをそのままアリーナに搬入することが出来ません。

今、世界中のアリーナはドアツードアで繋がっている時代になってきています。隣接する駐車場をスロープで繋ぎ、機材中継、コンテナなど、催事用の機材搬入口を作ることが、グローバル化のために是非とも必要なのです。

これらは何も新しいことではなく、日本のプロモーターや主催者が、外国人プロデューサー達から散々言

われていることでもあります。

日本は少子化になり、労務賃金は世界一高い国になりました。イベント設営にかかわる最も単純な基礎作業を効率的に改良して、コストを安く工夫する。これは、日本を豊かにすることのひとつだと思うのです。

イベント業界が向かう方向性

日本のイベント業界のシナリオとしては、例えばアメリカは不況の中でメジャーリーグが非常に活躍した一方で、失業問題がより深刻になりました。それが元で、今シーズンはチケットを二割ほど値下げします。

2010年の日本のデフレというのは、収縮はしつつも、あらゆる物に対して物の値段を考え直さなければならぬのではないかと思います。

イベント業界が向かう方向性のイメージとしては、急な上向きの変化は期待できません。業界全体がどうやって生き残るか、自活を計るかということが課題ではないでしょうか。それなりの技術力やデザイン力を持っている企業は、日本という国の中ばかりでなく、グローバル化した経済の中で生き残っていくという風に考えていったほうが良いと思います。

今後業界全体で取り組まなければならない事は、一般

社会生活における ISO 企業として適用して行っていますが、シンガポールでディスプレイという仕事に対する ISO 基準を決めようという運動が始まっています。ディスプレイの標準基準というか、そのような作業が進んでいます。

シミズオクトは、100年に一度の大不況という中で大拡張しようとしています。千葉スタジオも拡張しておりますし、下落合にもビルを買い、果たして全て上手くいくのかどうかと正直不安もあります。しかし、いわゆる経済の主流から見ると少し違う部分かもしれませんが、一般社会の一般大衆の好みというものやチケット一枚のイベントやスポーツに指向していると我々は考えております。

かつては映画が頂点にありましたが、テレビが出現して盛り上がると、映画が沈没しました。それで、今また映画が盛り上がってきています。そのような中で、映画産業というのはやはりチケット一枚の産業なのです。そういった点で、シミズオクトはきちんとチケット一枚とお得意様に対してきちんと対応すれば、決して時代の流れに左往してないということは言えると思いますので、拡張しても乗り切れると思っております。

(シミズオクト発行「BANZAI」清水卓治の有源清水より抜粋)